

【抄録】 ※ご発表の順に掲載しております。

<1>

差異・生命・愛——木村敏と「顕現せざるものの現象学」

清水健信

西田幾多郎の「自覚」「絶対の他」やハイデガーの「存在論的差異」を理論的基礎とする木村の精神病理学・臨床哲学は、名古屋時代以後においては、ヴァイツゼカーの生命論に触発されつつ、ドゥルーズ、デリダ、レヴィナス、アガンベン、アンリなど、フランス・イタリアの現代思想と交錯する形で彫琢されていった。その中には、いわゆる「顕現せざるものの現象学」に属する哲学者もいる（この「顕現せざるもの」の語は、木村の盟友・ブランケンブルクの没後刊行論集のタイトルにも使われている）。本発表ではまず、木村とフランス・イタリアの哲学者たちとの交錯を概論的に紹介する。その上で、この「顕現せざるものの現象学」の掉尾を飾るジャン＝リュック・マリオンの哲学を補助線として導入することで、木村臨床哲学とフランス・イタリア現代思想の接点を、「愛」の概念のうちに見出したい。

<2>

自他と生死——リクール、デリダと木村臨床哲学の交差——

杉村靖彦

臨床の現場に定位した独自の「自覚」の行程によって木村哲学が切り拓いた「あいだ」の思索は、いわゆる「生命論的転回」を経由して、水平的な「自他」としての「あいだ」が垂直的な「生死」としての「あいだ」と連動し響きあうような、立体的かつ重層的な光景へと行き着いた。そこには「臨床」哲学にかぎらず「哲学」そのものを喚起してやまない無尽蔵の富が内蔵されているが、木村の場合、それは同時代の先端的な諸思想の創造的取り込みと不可分であった。こうした観点から、「フランス現代思想」と木村との関係もさまざまに論じられてきたが、上記の木村哲学の到達点を照らす上で重要でありながら、まだほとんど顧みられていない材料がある。それは、木村が「老後の論文集」と呼ぶ『関係としての自己』（2005）あたりから登場する、リクールの『他者としての自己自身』（1990）の踏み込んだ活用である。本発表では、この書以降のリクールと同時期のデリダから浮かび上がる「自他」と「生死」の総合体と、木村が到達した立場とを交差させ、双方を往還することにより、問題自体の奥行きを探查してみたい。

<3>

コギト（デカルト）をめぐる現象学的・生命論的理解（木村敏、M アンリ）vs. 構造論的・言語論的理解（P ギヨ、ラカン）

加藤敏

デカルトが1641年に『省察』で導いた画期的なコギトの概念は、その解釈を拠り所に現在でも様々な学説が出されている。木村敏はM.アンリとともに現象学の見地から「わたしには自分がみているように思われる」（*videre videor*）という自己触発に定位した定式を重視しながら、独自の生命論的見地から、ヴィデオールを「わたしという生き物が生命の一活動として、世界に向かって何らかの行為を行う」、「生命の自発性の私への現れのようなものである」と根源的生命を基底にもつコギト理解を打ち出す。かたや構造論的・言語論的見地は、懐疑の途上で発せられる「私はある、私は存在する」という行為遂行性発話（performative utterance）をとおして生成するコギトの定式を重視する。そこでは無意識の活動を包摂するコギトが考案されている。そして、主体が言語によって構成される

という見地では、言語自体、木村のいう根源的生命とは次元を異にした躍動／跳躍する独自の生命を内にもっていると考えられる。

本発表では、こうした木村敏の現象学・生命論的立場と構造論的・言語論的立場を対比し、それぞれの主体理解の特徴を吟味したい。また木村は論じていないように思うが、後期の M.アンリはキリスト教神学を前面に打ち出し、キリストの言葉による主体生成を強調している。この論点も考慮しつつ、現代世界における主体をめぐる演者の考えを述べたい。

参考文献

木村 敏:生命のかたち かたちの生命.青土社、1992

木村 敏:分裂病の詩と真実.河合文化教育研究所、1998

ミシェル・アンリ(中 敬夫)訳:受肉 <肉>の哲学.法政大学出版局、2007

Gillot P:La question du sujet Descartes et Wittgenstein. CNRS EDITIONS,2020

加藤 敏:神・宗教・救い ウィットゲンシュタイン・アルト・ラカン.金剛出版、2026

<4>

木村精神病理学とドゥルーズ哲学——アクチュアリティをめぐる

斎藤慶典

1. リアリティ(réalité)とアクチュアリティ(actualité)
2. ヴァーチャリティ(virtualité)とアクチュアリティ
 - a) アンチ・オイディプス
 - b) 「変身」としてのアクチュアリティ

木村はかつて、ドゥルーズ哲学の中核概念の一つである「アクチュアリティ(actualité)」にいち早く注目し、リアリティとは区別されたそのアクチュアリティの成立不全に精神病理学的な症状(典型的には離人症)の核心を見て取ることを試みた*。これに対して斎藤は、木村のアクチュアリティ理解に異論を提出するとともに、リアリティとアクチュアリティの布置について新たな提案を行なった**。斎藤の見るかぎり、残念ながらこの議論は木村のもとでその後何らかの展開を見ることのないままに終わった(以上、第1節)。

木村を追悼/記念するシンポジウムで提題の機会を与えられた今回、彼によって光を当てられたドゥルーズのアクチュアリティ概念のさらなる展開の可能性を私なりに追究することを以て、木村のこの先見の明を未来へと向けて開く一つの端緒としたい(以上、第2節)。この議論は、反精神分析として展開されたドゥルーズ/ガタリ『アンチ・オイディプス』での動向の確認を経て(同節 a)、後年のドゥルーズから「変身のエチカ」とでも呼ぶべきものを取り出す作業へと進む(同節 b)。

*木村敏『偶然性の精神病理』序論1994年、『分裂病の詩と真実』リアリティとアクチュアリティ1998年

**斎藤慶典『心という場所』第7章「アクチュアリティの/と場所」2003年、木村敏・谷徹・斎藤慶典「鼎談 アクチュアリティとヴァーチャリティの関係をめぐる」2004年『講座・生命』第7巻、『思想』座談会「瞬間と偶然をめぐる」2009年3月号、など